

大学生入門 - 文書リテラシー体験記

Lesson 1

小論文とレポートの違いはわかりますか？

図書館情報メディア系

三波千穂美先生

中央図書館ラーニング・アドバイザー 栗原拓也さん（人文社会科学研究科）



レポート提出——それは、大学生になれば避けては通れない課題です。でも、レポートってそもそも何だろう？どんなレポートが「いいレポート」なんだろう？こうした疑問に答えるべく、おもに学類の1,2年生を対象として三波先生によるセミナーが図書館で開催されました。

さて、まず三波先生は、この世界にはいろんな「文書」があるということからセミナーをスタートします。契約書、企画書、そしてレポート……普段はあまり気にしないことですが、これらの「文書」はどんな違いから区別されているのでしょうか。それは、「目的」の違いです。契約書するために契約書があり、企画を提案するために企画書がある。言いかえると、「文書」が必要となるときには、何が「求められている」のです。

このことは、もちろん大学の課題にも当てはまります。課題に取り組むさいには、「この課題では何が求められているのか」をつねに意識しなくてはなりません。たとえば、「～という本の第二章を読んで要約しなさい」という課題がでたときには、「それを読み、まとめて報告すること」が求められています。また、「～について自分の考えを自由に展開しなさい」という課題に対しては、与えられた問題について自分の考えを論じなくてはなりません。求められていることと違うことをしていたら、いい評価はもらえないでしょう。

ところで、上述の例のうち前者はレポートに、後者は論文に対応しています。ここで、各「文書」の目的を列挙してみましょう。

- ・レポート……調べたことについての結果を報告することが目的。
- ・論文……問題を解決することが目的。
- ・(参考までに)小論文……自分の意見を理由や根拠によって裏付けて説得することが目的。



こうして見てみると、「小論文が大きくなったら論文になるんじゃない？」とはもう言えませんね。

セミナーの後半では、このなかでもとくに学術論文が話題となりました。学術論文は、問題を見つけ、調査・分析によって得られた成果を公表するものです。このさい、結論を支えることになる論拠は、誰が考えても(誰が実験しても)同じ結論になるようなものでなければなりません(このことを再現性といいます)。

こうした結論—論拠の構造は論文のもっとも基礎的なものですが、それにくわえて三波先生は「論文のスタイルで書けば論文になる！」とおっしゃいます。そのために先生がお勧めしていたのが、スタイルを「マネる」こと。それぞれの分野がそれぞれの論文の形式を持っているので、自分の勉強する領域の雑誌や先生方の論文から学んでいくのがよいということでした。

ただし、形式はマネてもいいけれど、内容を盗むこと(剽窃)は絶対にしてはいけません！他人の著書等から文章を引いてきたいというときには、出典を明示するなど、適切な仕方で引用することが大切です。

今回のセミナーを受けて、この課題には何が求められているのか、ということ意識して課題に取り組んでいくことができそうです。



図書館セミナーの内容・雰囲気をお伝えするための、ラーニング・アドバイザーによる2015年春学期開催「大学生入門」のによる受講レポートです。秋学期や来年度のセミナーにもぜひご参加ください！

Lesson 2

情報を構造化する

図書館情報メディア系

三波千穂美先生

中央図書館ラーニング・アドバイザー 小南理恵さん（図書館情報メディア研究科）

大学生入門「文書リテラシー」第2回は「情報を構造化する」と題して、図書館情報メディア系の三波千穂美先生によるセミナーが行われました。

第1回では世の中の様々な「文書」について、目的の違いという視点から「レポートとは何なのか？」が論じらるる構成する要素とは何か？」をテーマに進んでいきました。

大学生活を送る上で欠かせないレポートですが、レポートを執筆するうえでもっとも大切なことは何でしょうか？それは「客観性」である、と先生は語ります。なぜなら、自分の思うまま、言いたいまま何かを伝えようとしても、その内容がきちんと相手に伝わっているかどうかはわかりません。そこで重要になってくるのが、自分の言いたいこと・考えていることが相手に「伝わる状態」「伝わる環境」を整えることです。この、自分の伝えたいことを相手に伝えるための環境づくりの手段が、今回のセミナーの副題でもある情報の「構造化」です。

では相手に物事をわかりやすく伝えるためには、何を、どのように伝えればよいのでしょうか？さらに言えば、レポートにはどのような要素が必要なのでしょう？また、実際にレポートを書く上で、どのようなことに気をつければよいのでしょうか？こうした問いに答えるべく、私たち学生が課題で執筆するレポートの発展系とも言える、学術論文を例に挙げて、その構成、作成過程、各要素の役割などについてお話しされました。

お話の中でも特に先生が強調されていたのは、論文の各部分の役割についてです。学術論文は本文とそれ以外の要素で成り立っていますが、これらの要素にはそれぞれ役割があります。レポートを書くにあたって、論文同様にその一箇所一箇所が何を目的としているのかを考えながら文章を構成していく必要があります。



例えば、本文の「はじめに」「序論」の役割は①取り上げる問題は何かを示すこと、②(その論文やレポートを読む上で)必要な知識を確認することです。なぜなら、読み手はこれからどのような話が始まるのか知らないため、書き手はこれから何の話をするのかをきちんと説明する必要があります。また「本論」では①データなどの事実と自分自身の意見を用いて論拠を示すこと、②さらに、そこから導き出される結果について述べる必要があります。ここでポイントとなるのは自分の意見だけでは論拠にはならない、ということです。このように、各要素の役割を踏まえることで、より説得力のある文章になっていきます。これは論文やレポートだけではなく、人を説得したり、お願いしたりするなど、普段の会話でも重要なノウハウです。

セミナーの後半は、「レポートの締め切りを延ばしてもらうよう先生にお願いする学生」を題材にしたユニークな例文を用いながら、読み手(聞き手)を説得する効果的な方法について考えるほか、携帯電話の取り扱い説明書の構成について考えるなど、情報の構造化について実際に自分たちで考えるかたちで進められました。レポートや論文のみに留まらず、相手になにかを伝えるためにはどうするべきか？ということを変えて考えることのできるセミナーでした。

秋学期のセミナー開催予定

大学生基礎 -事実？ 意見？-

12/3, 10 15:30-16:30(中央図書館 2階ラウンジ)